

今昔物語 第21話

市内の石仏

市域内に現存する石仏は、旧街道沿いの古寺の境内や門脇、旧村の辻堂や村の入り口などにあり、日ごろ目に触れながら無関心だったり、気付かず過ごしています。石仏は、わたしたちの先祖が民間信仰の心を形として後生に残したものです。

◎一石十三仏(龍間・称迎寺内)

十三仏は、人間は死後直ちに往生でき



るものではなく、その間に行われる13回の法要に配される仏を供養すれば、極楽往生できるという信仰です。

◎一石六地藏(龍間)

毎月、8・14・15・

23・29・30日の6日

を六斎日といい、こ



の日には悪鬼が勢いを得て、種々の悪事が起きるので、戒めを守り、善事をする必要があります。この六斎日に念仏を唱え精進しました。

◎山神石(北条7丁目)

山を支配する神をあがめるもので、山路の行き帰りには礼拝している人を見かけることがあります。

◎庚申塔(中垣内2丁目)

市内唯一の庚申

塔、銘はありませ

んが江戸時代のもの

のと思われ、三猿とひとつがいの鶏が彫られています。



庚申信仰は、十干十二支の組み合わせによる庚申の晩に祭られる民間信仰で、60日に一回、回ってきます。

◎道祖神(龍間北条・中垣内)

道祖神を塞ぐの神ともいいます。こ

れは仏教の六道輪廻の思想と結びつ

き、村に入ってくる外敵や病気を除

去し、また生死を司る神として地

蔵男女二神、あるいは神霊のある丸

い石などを神として村の辻などに祀

り崇拝していた庶民信仰の一つです。

◎地藏

地藏は仏教でいう一菩薩で、大慈

悲をもつて衆生の苦しみを除いてく

れます。それは大地が万物を育成す

る力を蔵するに似たものがあるとし

て、地藏と名付けられました。さらに

地藏は日本古来の道祖神と習合し、

路傍に立つて村内に病魔の入るのを

防ぐ防疫の仏となりました。

今昔物語 第22話

市内の記念碑

市域内には、地域の大きな取り組みに対して、記念碑が建てられています。

◎樋門建設記念碑

(太子田2丁目・明福寺前)

大和川付替後、次第に水量の下がった本市内一円は、深野池・新開池(諸福2丁目・鴻池新田駅付近)をはじめ多くの低湿地が新田開発されました。しかし、もともと低い土地だけに洪水の不安は去らず、逆に干害に苦しめられることもありました。そこで、寝屋川や恩智川との間に水路を設け、排水・用水の用に供しました。太子田樋も、そうした数ある樋の一つです。

碑によると、弘化2(一八四五年)に樋が作られ、以後3回改修が行われたことが分かります。安政5(一八五六)年には石材を用い、明治29年から舟の航行も可能になり、明治34年には樋の間の両側の土手を石組としたことを、碑文は語り伝えます。なお、舟の通行は、井路と寝屋川の水位が異なるため、片方ずつ水位を合わせて出入りしていました。

◎排水路記念碑(御領・菅原神社前)  
太子田・御領・水野・赤井地区の排水は太子田の榎本樋・太子田樋に頼っていました。このうち御領地区は特に低く、雨がきくと真っ先に田んぼが水

をかぶり、逆に水がひくのは最後という状態でした。

そこで御領地区では昭和18年の秋から工事に取掛かり、真西に井路を掘り、約1。先の新田・槍ヶ崎で砂子井路に直結しました。その結果、いつまでも冠水している状態はなくなりました。

◎大峰山参拝三十三度記念碑

(赤井・新田・灰塚大窪)

河内地方の修験者は大峰山に入り、何回行を積んだかにより、その人の修業度を表しました。修験道は山岳仏教と結び付いているので、仏教界でいう33をもつて一つの区切りとしています。つまり、この碑は年に一度か二度大峰山に入り年を経る中で入山すること33回、各行場で苦しい修行に耐えぬいた行者が、そのあかしとして建立したものです。

◎天然氷製造記念燈籠

(龍間神社境内)

平安期より讚良(旧四条町)に氷室が2カ所設けられていたことは延喜式に載っています。場所は、室池と龍間と考えられ、龍間で天然氷を作っていたのは大正末ころまでで、昭和5年に記念して、燈籠が建てられました。